

課題名 IPM実践産地 志布志ピーマンの持続的発展に向けて ～研究会組織を核とした普及活動～

所属名 : 曾於畑地かんがい農業推進センター農業普及課
発表者名 : 樋口 康一

<活動事例の要旨>

JA そおピーマン専門部会を対象に、IPM による防除体系確立に向けた課題解決を図った。活動にあたっては、生産者主体の研究会の組織育成を行い、技術的成果を得るとともに、部会内に成果を波及させる体制が構築された。これらの活動を通じて産地の持続的発展に寄与する組織育成が図られた。

1 計画された活動の課題・目標と策定過程

(1) 課題・目標と設定理由及び活動の内容と方法

近年、薬剤散布に偏重した防除法の農業経営に対するリスクはますます高まっており、天敵類を活用した IPM 技術を取り入れ、総合的で持続的な防除体系を確立する必要がある。そこで、JA そおピーマン専門部会を対象に、研究会活動の実践支援によって効率的に IPM 技術確立を行い、さらにその成果を波及させる活動に取り組んだ。

(2) 計画の策定過程

ピーマン部会では平成 10 年頃から農業試験場の天敵現地試験ほ場であった志布志市農業公社を核として、県内でいち早く天敵防除を受け入れる素地が形成されていた。その後普及によるスワルスキーカブリダニ等の実証によって、市販天敵については、ほぼ一般技術として定着が図られた。このような状況をさらに発展させるため、普及指導計画の基本計画に位置づけられた 2 課題を表 1 に示したように関連づけて活動した。

表 1. 基本計画の概要

| 項目 | | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 |
|--------------------------|-----------------|----------------|-----|------------|---------|-----|
| 曾於 IPM 産地の育成 | 土着天敵導入農家 | 技術確立・マニュアル作成 | | 技術支援・普及拡大 | | |
| | IPM 技術導入農家 | IPM 技術導入支援 | | | 普及拡大 | |
| | 地域土着天敵利活用 | 生態把握定点調査・実証ほ設置 | | | マニュアル作成 | 普及 |
| 重点支援対象農家の技術・経営改善支援と成果の波及 | 各研究会活動による産地課題解決 | | | 研究会活動成果の波及 | | |

2 普及活動の内容 (調査研究の関わりについても記述する。)

(1) 活動の経過 以下の調査研究課題を活動に位置づけて取り組んだ。

- ・ H26～H27 土着天敵類を活用したピーマンの新たな IPM 技術の確立
- ・ H28 アブラムシ類に対する IPM 技術の確立
- ・ H29 ピーマンの研究会組織等を核とした IPM 技術の確立

畑かんCが事務局となり、土着天敵タバコカスミカメ等の利用についての研究会を立ち上げ、実証ほの設置と運営を行った。この中で定期的な現地・室内検討の進行管理を行い、成果をマニュアルとして作り上げ、これを活用した講習会で技術の定着を図った。アブラムシ類の防除に関しても同様の取り組みを行うことができたが、さらに高度で難易度の高いこの技術をきめ細かく普及定着させるため、研究会組織を世話役に位置づけた実践グループを立ち上げ、生産者主体で自主的な運営ができる組織育成を行った。

(2) 指導・支援の体制

研究会への支援は、国・県の試験研究機関、資材関係メーカー、JA、市(公社)によるサポート体制の下、普及はコーディネーター役としてその調整・橋渡しを担った。

3 普及活動の成果

(1) 課題及び目標の達成状況とその要因

研究会組織の実証例に基づき作成されたマニュアルの公表によって土着天敵タバコカスミカメの利用が進み、県基準では10回以上であった殺虫剤散布回数(アザミウマ対象)も大半の生産者が1作10回以下となり、IPMの意識が浸透した。

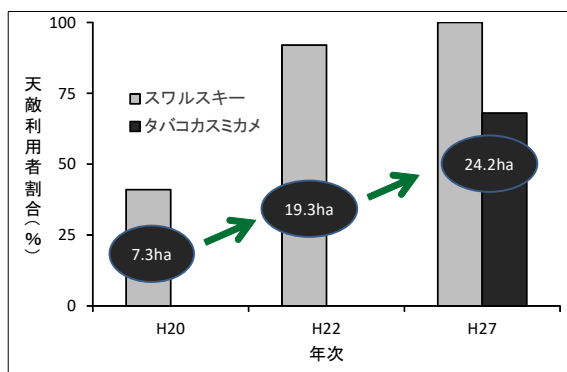


図1. 部会における天敵利用者割合

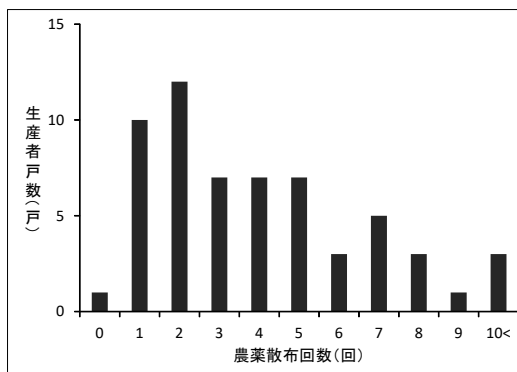


図2. アザミウマ登録農薬についての散布回数別 生産者戸数

また、研究会は、ピーマン部会内で自ら課題解決を図る機能を有した自主研究組織として産地の持続的発展を支える牽引役となりつつある。

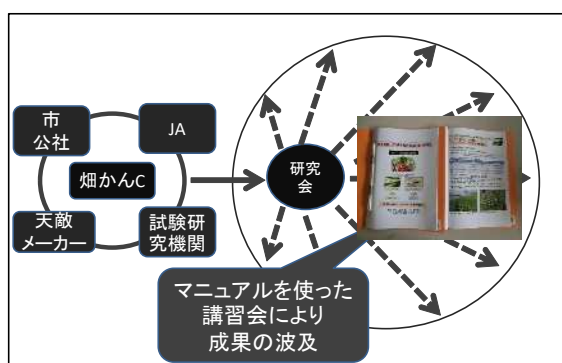


図3. 研究会の成果が部会内に波及するイメージ

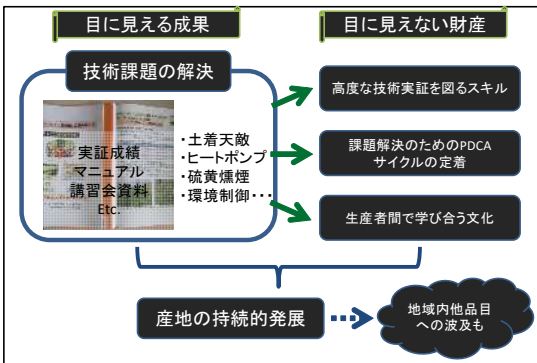


図4. 研究会活動への支援がもたらすもの

(2) 活動に対する生産者・農家の評価

研究会メンバーが部会内でのIPMに関する相談役になることで、生産者は日常的に情報交換ができるようになった。相談役も新規実践者とともに地域に役立つ新技術を作り上げているといった実感があり、喜びを感じている。

(3) 地域農業振興への貢献

IPM実践の成果により部会の注目度は高まり、情報や人的な交流が盛んになった。また、イチゴへの天敵リレー等他品目への波及の動きが始まった。

4 今後の普及活動に向けて

(1) 今後の課題

生産者の創意を生かした自主的な活動が持続していけるように支援する必要がある。

(2) 今後の活用に向けて

イチゴとの天敵リレー等、技術的なモデルとして他品目との連携、成果の波及に努める。